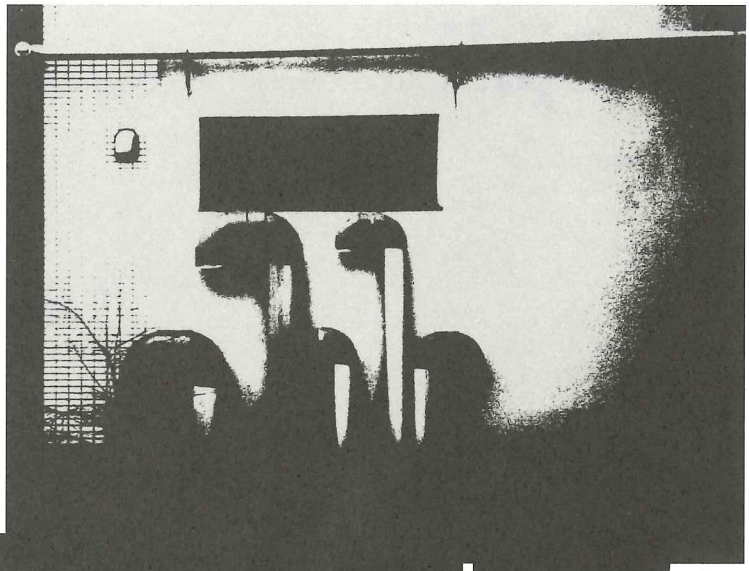

宗教とメディア、そして善悪の彼岸

森 達也
mori tatsuya

いまから二十年近く前になるけれど、禅宗の寺で半年ほど修行したことがある。大学は出たけれど就職はせず、いまで言えば、ニートやフリーターなどと呼称されるような生活をしていたころだ。大学を中退して、やはりアルバイト生活を送っていた友人が、その寺に住み込みで修行していたことがあり、寺で修行するなら家賃も食費も必要ないと教えられ、一度くらいは寺の生活も悪くはないかな、と考えたうえでの結論だった。

神奈川の茅ヶ崎駅に降り立って、まずは土産を買い、バスを乗り継いでやっと寺に着いた。玄関先で応対に現れた僧侶に、「Kさん、いらっしゃいますか？」と僕は聞いた。この人物をまずは訪ねるようにと、友人に教えられていた僧侶の名だ。応対する僧侶の表情に、微かに困惑が浮かんだ。なぜだろう？　と思う間もなく、「Kは昨夜、入院したんですよ」と僧侶は言った。

「昨夜ですか？」

「どちらさまですか」

「森と言います。Kさん、なぜ入院したんですか？」

「階段を踏み外したんです。大したけがじゃないです。森さんのことは聞いています。今日から修行は始めるんですね？」

こうして僕の、寺での生活は始まった。朝は五時に起きて一時間の座禅。それから朝食を食べてから掃除などの作務の時間となり、昼食をとってから二時間の座禅。畑仕事などをして、夜はまた二時間の座禅（夕食は食べない）。そんな毎日だった。

二週間が過ぎるころ、昼食を食べながら、

ひとりの僧侶の袈裟の下に、見事な刺青が彫られていることに気がついた。思わず見つめていたら、うどんを啜る手を休め、その僧侶は、「若気の至りだよ」と苦笑した。

「見事ですね」

「まあ、ここに来る前はいろいろあったからね」

同じころ、Kが階段を転げ落ちた理由は、部屋でシンナーを吸ってラリってしまったことが原因だと、別の僧侶から聞かされた。

「本当ですか？」

「やめました、と言っていたのにな」

週に一回は休養日だ。何人かの僧侶はこの日は夕刻から酒を飲む。お相伴にあずかっていたら、「何かつまみを作れ」と命じられた。

「でも酒の肴になるような素材はないですよね」

「冷蔵庫に入っているよ」

台所とは別の場所に置かれていた冷蔵庫の扉を開けると、貰いものなのか、きれいに包装された特上の松阪牛と、冷凍された大量の鳥の腿肉が入っていた。

三カ月が過ぎるころ、山梨の修行場に行くようにと、僕は方丈（住職）さんから命じられた。JR韮崎駅から車で四十分ほど、山の中腹にあった幼稚園を寺で買い取って、修行場にしているとのことだった。着いてみれば、ここで修行をしているのは八人の欧米人だった。こうして、それからさらに二カ月余り、ここで僕は、八人の欧米人たちと自給自足の生活をしながら座禅三昧の日々を送っていた。

欧米人たちの国籍はさまざまだが、寺に来る前はインドを放浪していたことは共通していた。当時は、ヒッピーなどと呼ばれていた彼らの間で、「来るものは拒まず」というこの寺のことはよく知られていて、座禅を試してみたいと来日した男たちだった。

だからジャンキーもいる。若いころに人を殺して服役したという男もいる。生い立ちや家庭環境はさまざまだが、いまはひたすら座禅に救いを求めていることは共通していた。

「座禅はいい」

リーダー格だったジョージは、事あるごとに僕に言った。

「ドラッグなんてもう要らない。ナチュラル・ハイを体験できる」

「でもさ、ジョージ、その目的は信仰としては不純なんじゃないの？」

そう聞き返すと、ジョージは大仰な表情で僕に言う。

「もちろん、ナチュラル・ハイ自体は信仰とは別だよ。僕はいま、身も心も曹洞宗に捧げている。仏教は素晴らしい。生まれてから四十年余り、ずっと自分が何のために生まれたのかがわからなかった。何をすればよいのかもわからなかった。だから世界中を放浪した。いまはわかる。僕はこうして修行するために生まれたのだ。仏陀の素晴らしい教えを知り、そして広めるために生まれたのだ。座禅のナチュラル・ハイは、仏教が僕に与えてくれたささやかなご褒美さ」

南アルプスの中腹の幼稚園での生活が二カ月を過ぎるころ、僕はもう一度寺に呼び戻されて、そしてそろそろ社会に戻りなさい、と方丈さんに諭された。

「ただ座っているだけでは、悟りなどひらけない。いろいろな体験を経て、そして座り続けることで見えてくるものがある。でもね、森君はまだ、その意味では若すぎる。もう少し実社会で体験を重ねてから、またその気になったら寺に来なさい。寺は逃げないからね」

方丈さんの言葉は、もしかしたら方便だったのかもしれない。でも僕自身、そろそろ潮時かなと思っていたので、寺を出ることに抵抗はなかった。荷物を取りに南アルプスの幼稚園に戻り、ジョージや全員に別れを告げた。

翌日からは半年ぶりに、四畳半のアパートでアルバイトの日々だ。でもしばらくは、座禅を組みたくて困った。寺からもらってきた坐蒲を尻の下に敷き、一日に五回くらいは、最低でも三十分は座禅を組んでいた。一日に五回。書きながらふと思うけれど、イスラム教徒の礼拝だ。でも一カ月もすれば、その習慣もだんだん薄れ、坐蒲はいつの間にかただ

のクッションとなっていて、やがて捨ててしまった。

それから十数年後、テレビ業界で仕事をしていた僕は、オウム真理教のドキュメンタリー番組を撮る過程で、信者たちを絶対的な悪として看做していないとの理由で制作の中止命令を受け、これに従わずに撮影を続けていたことで、契約の解除を告げられた。その後は一人で撮り続け、自主制作映画として「A」を発表した。いまの僕の原点には、間違いなくオウム真理教の信者たちと過ごした一年半にわたる撮影の日々があり、さらにその原点には、十数年前に過ごした禅寺での生活がきっとある。

寺に集まっていた男たちは、どちらかといえば不器用で、社会にうまく適応できなかったタイプが多い。だからこそ周囲との摩擦は大きく、ドラッグなどに逃げ、ときには人を傷つけ、そして自分も傷ついた男たちだ。酒が入ると、途端に粗暴になる僧侶がいた。虚言癖のドイツ人がいた。関西では有名な暴力団の構成員だった僧侶もいた。父親を半殺しにしたイギリス人もいた。前科三犯の僧侶がいた。その半生は、皆一様に傷だらけだった。そしてまた、皆一様に優しかった。

オウムの事件が起きたとき、マスメディアに帰属しながら僕は、そのマスメディアが吐き散らす「残虐な殺人集団」とか、「洗脳された悪魔の組織」などの語彙に、どうしても馴染めなかった。事件や現象は、そんな一面的なものじゃない。とても多面的なのだ。でもメディアは、その多面性からどうしても目をそらす。そしてその帰結として、事象や現象は、かぎりなく単純化される。

こうして社会は、メディアによって矮小化され、そしてこの矮小化された情報を日々受け取る視聴者や読者は、複雑な論理を嫌うようになる。あとはもう悪循環。わかりやすさを好む視聴者や読者によって、メディアは事件や現象の単純化を当たり前のようにこなし始め、そのスパイラルが加速する。

発表した自主制作映画「A」を観た人のほとんどは、「オウム信者が、あれほどに普通だということに衝撃を受けた」と口にする。

「笑ったり冗談を言ったり、ときには悩みこんでいたり……。悪の洗脳組織とばかり思っていたから、この映画は衝撃でした。いやむしろ彼らは、普通よりもずっと優しくて、純粋で、善良そうに見えました。でも、ならばなぜ、そんな優しい人たちが、あれほどに凶悪な事件を起こしたのでしょう?」

そう質問されるたびに僕は、「優しくて純粋で善良だからこそ、彼らはあれほどの事件を起こしたのです」と答える。直感だ。そのメカニズムはまだ僕にも体得できていない。でも自信はある。残虐で、粗暴で、人の命など何とも思っていない人がもし実在するのなら、これほど大規模で不特定多数を狙った犯行など、起こせるはずがない。優しくて、純粋で、善良だからこそ、彼らは大量殺人ができたのだ。地下鉄サリン事件が起きたとき、「本来は人を救うはずの宗教が、人を殺めるなどとんでもない。このことからも、オウムは宗教ではないことは明らかだ」と真顔で論じるジャーナリストや知識人は大勢いた。あまりに稚拙で、短絡的な考察だ。歴史の縦軸を見ても、世界の横軸を見ても、信仰が戦争や虐殺と親和性が高いことは、小学生にだってわかるほどに自明なはずだ。

ならばなぜ、人を救うはずの宗教が、血生臭い殺戮と親和性が高いのか?

僕なりにその解答はある。宗教の存在意義に、このテーゼは密接に絡んでいる。

宗教を必要とするのは人間だけだ。なぜなら、あらゆる生き物のなかで人間だけが、自らがいつかは死んで消滅することを知ってしまったからだ。

つまり、宗教の最大のレゾンデートル(raison d'être 存在理由)は、死への恐怖を緩和して、自らがいつかは必ず消えるというこの絶対矛盾を、整合化することにある。世界にはさまざまな宗教があるが、極楽浄土や輪廻転生の教えは、ほぼ共通している。つまり宗教は、死後を担保することで、与えられたこの生を

人がまっとうできるように、ア・プリオリ（a priori 先天的）にDNAに付与されたシステムなのだ。

ところがこのシステムには、大きなリスクがある。生と死を等価に、あるいは、ときにはその価値を転換させる機能があるからだ。だからこそ信仰は、殺戮と強い親和性をもつ。ほとんどの宗教が自殺を強く禁じている理由は、死への垣根を引き下げてしまうからだ。イスラム教がこれほどに広く分布し、強い信仰に支えられている理由は、死後の世界を強く担保するからだ。その副作用が、「自爆テロ」と呼称されるジハードだ。これが宗教の本質だ。とても危険な概念なのだ。でも、だからと言って、自らが死ぬことを知ってしまった人間は、今後も絶対に宗教を手放せない。

ところが仏教は、この死と生の概念については、他の宗教とは少し違う。仏陀は死後の世界については、一言も口にはしていない。ただしその後、布教の過程で仏教は、死後の世界観を強く打ち出した。

僕と真宗との付き合いは、そもそもは四年前、東京の築地本願寺から、「A」の上映会を開催したいとの申し出があってからだ。上映後の質疑応答に呼ばれた僕は、上映会終了後の懇親会にも参加した。真宗の僧侶たちは、剃髪をあまりしない。酒や煙草もご法度ではないし、袈裟も公式の場でないかぎりは、さっさと脱いでしまう人が多い。若い僧侶には、茶髪やピアスも普通にいる。型に捉われないこのスタイルは、真宗の祖師である親鸞の影響が大きいのだろう。同時につくづく感じたのは、オウムから目を逸らそうとしていた自分たちを、もう一度凝視し、必死に答えを模索する彼らの真摯さだった。

第二次世界大戦時に真宗は、「罪悪人を膺懲し、救済せんがためには、殺生も亦、時にその方法として採用せらるべき」（『仏教と戦争』昭和十二年八月、本願寺計画課発行）として、この戦争を聖戦と位置づけ、積極的に協力することを門徒に呼びかけた。もう一度このフレーズを熟読してほしい。オウムが凶悪に変質した最重要な因子として取りざたされた「タントラ・ヴァジラヤーナ」を想起させると思うのは、僕だけだろうか。

ジョゼフ・スミスが創設したモルモン教は、現在ではアメリカ全人口の二・八%を占める巨大宗教だが、その初期の歴史が、夥しい殺戮に彩られていたことはよく知られている。伝道師たちは布教のために、いまも数多く来日している。いかにも善良で、実直そうな彼らに、話しかけられた人も多いと思う。

十字軍もあれば一向一揆もある。北アイルランドでは、カソリックとプロテスタントの争いでテロが頻発した。イスラエル・パレスチナ問題に、ボスニア・ヘルツェゴビナからマケドニア、ロシアのチェチェンまで、宗教は常に、戦争や虐殺の重要な因子としてはたらいている。

キリスト教福音派の敬虔な信者であるブッシュは、イスラム教の過激な僕であるビン・ラディンに報復するために、世界をテロの連鎖に巻き込んだ。

死への親和性は、宗教の本質のひとつだ。ただし、死ぬことを知ってしまった人類は、今後も宗教を手放せない。だからこそ、個々の事例から目を背けずに、しっかりと凝視することが重要だ。人を大量に殺戮するそのメカニズムは、邪悪や凶暴、野心や利権などの要素ではなく、当事者にとっては良かれと思う善意なのだ。悪意は後ろめたさを伴う。でも、善意は歯止めが利かない。だからこそ戦争や虐殺へと肥大する。すべてが終わった後に、人は焼け野原で天を仰ぐ。どうしてこんなことになってしまったのか？　と嘆きながら。

メディアが発達し、情報の流通がひと昔前とは比べものにならないくらいに発達した現代だからこそ、宗教のこの負のメカニズムが大規模にはたらく可能性は高い。だから見つめねばならない。リスクをゼロにすることはできなくても、軽減することはできるはずだ。

（もり　たつや・映画監督、ドキュメンタリー作家）
近著に『ドキュメンタリーは嘘をつく』草思社